

防人制変遷の一時点

——続紀天平二年九月己卯条の解釈——

松 本 政 春

はじめに

従来防人に関する研究著作が若干あり、それには変遷の一時点においての東国防人専遣が、通説としてのべられている。だがそれら関連事項において、必ずしも全面的に同意していない学者もいる。このような先学の研究成果を土台にして、私なりに続紀天平二年九月己卯条の解釈を中心として、さ々やかながら通説を再認識する意味で、それにつき考察を試みたいと思う。ためにまず、

(一)養老令に規定されている防人の性格を明らかにし、(二)大化二年より天平二年までの防人関連史料をあげ、(三)続紀天平二年九月己卯条の解釈、へと論を進めていきたい。

(一) 養老令に見える防人の性格

養老令の大部分の陳型をとりめて、令義解に見える史料を左にあげよう。

(1) 凡兵士ノ上番者。向京二年。向防三年。不計行程。

(軍防令義解兵士上番条)

(2) 凡兵士向京者名衛士。(中路)守邊者名防人。

(軍防令義解衛士防人条)

(3) 兵部省官司。

卿一人。掌内外武官名帳。考課。選叙。位記。兵士以上

名帳。朝集。祿賜。假使。差發兵士。

又請差遣衛士防人。(下略)。

(職員令義解兵部省条)

(4) 凡衛士向京。防人至津之間。皆令國司親自部領。衛士至京

之日。兵部先檢閱戎具。分一配三府。若有闕少者。隨事

推罪。自津發日。車使部領。付大宰府。

(軍防令義解國司部領衛士防人条)

(5) 凡防人向防。名費私糧。自津發日。隨給公糧。

(軍防令義解費私糧条)

(6) 大宰府帶筑前國。

(上略)防人正一人。掌防人名帳。戎具。教閱。及食料田

事。佑一人。掌同正。令史一人。(下略)

(職員令義解大宰府条)

(7) 凡防人欲至。所在官司。預爲部分。分者防人未至之前。依官

差配預爲。防人至之後。一日。即共舊人。分付食料

使訟。謂主當之處。有差伏等類。守邊之處。每季更代使。苦

(軍防令義解欲至条)

(8) 凡舊防人替。即給程糧。發遣新人雖有欠。不死元數。

不得輒以舊人留。助之義也。

(軍防令義解舊防人条)

(9) 凡防人在防守固之外。各量防人多少。酌於當處。側近

解略。給空閑地。逐水陸所宜。斟酌營種。并雜菜。以供防

人食。解略所須牛力。解略官給所收苗子。每季錄數

附朝集使。申太政官。

(軍防令義解在防条)

(10) 凡舍人。史生。伴部。使部。兵衛。衛士。仕丁。防人。帳

內。資人。事力。(中路)並免課役。(下略)

(賦役令義解舍人史生条)

(11) (上略)其衛士防人還。知之日。並免國內上番。解略衛士一

年。防人三年。

(軍防令義解兵士以上条)

以上の規定により、その性格が理解されるであらう。だが、果してこの規定通り実施されたかは不明である。しかるに大日本古文書・万葉集・六国史等により、ほぼ実施せられていたことが、明かにされるのである。

(二) 大化二年より天平二年までの関連史料

本稿の中心である統紀天平二年九月己卯条の解釈をするに當つて、変遷の前段階としての天平二年迄の関連史料をあげるこ

とは必要である。

防人の初見は、日本書紀大化二年⁽⁶⁴⁶⁾正月の大化改新の詔である。だがこれは後の近江令・天武令・大室令の文を模倣したのではないかという疑問があり^(史料12)、改新に当り防人の制が設けられたかどうかは不明である。

次に防人配置についての確かな史料としては、天智紀三年⁽⁶⁷³⁾条である。これはその前年即ち天智天皇二年⁽⁶⁶³⁾の百濟復興のため送った二万七千の大軍が、白村江の戦で大敗し、百濟が滅び、唐と新羅の軍が南朝鮮を制圧した危機に対して、配置されたものであるに違いない。この時に置かれた防人^(史料13)が、猿狖・蒼老令・万葉集・正倉院文書などの史料に散見される防人の制の直接の由体となつたと考えられる。

ついで、天智天皇十年⁽⁶⁷¹⁾にも対馬の防人のことが見えるが、これの防人には在地の者が充てられたのではなく、後の軍防令のように、中央から送られたらしい。このことは、天武天皇十四年⁽⁶⁸⁵⁾の筑紫に遣された防人等が、海中に飄蕩し衣衾を失つたため防人の衣服として、布四百五十八端を筑紫に下したという^(史料14)記事により明らかである。

同じように、持統天皇三年⁽⁶⁷⁹⁾には筑紫防人の年限の満ちたる者の交替が令せられている。この頃より大室・養老令制定の時期を通じて、後に述べる天平二年⁽⁷³⁰⁾の条までは、軍防令に規定されていたものと思われる。

次に和銅六年⁽⁷¹⁵⁾には、任地に赴く防人に事使を差遣する事を改め、遷送すべき事を命ぜられている^(史料15)。ついで、養紀天平二年九月⁽⁷³⁰⁾己卯⁽¹⁸⁾の同題の記事がでてくるのである。

史料

(12) 其二日、初、修京師、置畿内國司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬、傳馬、(下略)。

(孝德紀大化二年正月条)

(13) 是歲、於對馬島、吉岐島、筑紫國等、置防人與驛馬。

(天智紀三年)

(14) 甲午朔癸卯、對馬國司遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道文、筑紫、唐薩野馬、韓島、勝婆婆、布師首營、四人從唐來曰、唐國使人郭務悛等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、總合、二千人、乘船卅七隻、俱泊於比智島、相謂之曰、今吾輩人船數衆、忽然到彼、恐彼防人驚駭、射戰、乃遣道文等、豫稍板、陳來朝之意。

(天智紀十年十一月)

(15) 壬申朔乙亥、遣筑紫防人等、飄蕩海中、皆失衣衾、則為防人衣服、以布四百五十八端、給下於筑紫。

(天武紀十四年十二月)

(16) 甲申朔丙申、詔、筑紫防人滿年限者、遷。

(持統紀三年二月)

(17) 戊午、詔、防人赴任時、差遣使、由是、驛使繁多、人馬並疲、宜遷送、發一馬。

(養紀和銅六年)

(18) 傳諸國防人。

(養紀天平二年九月己卯)

(注) 津田左吉「大化改新の研究」(『日本古代史の研究』所収) 井上光貞「郡司制度の成立年代について」(『古代学』二)

(三) 統紀天平二年九月己卯茶の解狀

以上(一)(二)において防人の性格及び交還の一部区のべてきたのであるが、そのようなる予備知識の上に、これから問題の核心へ入って行きたい。

停諸國防人

右の史料は、一見防人割の全面的廃止を意味するかのようによ受とつれ易いが、後述の考案によると、別の解釈がなされるのである。

まず考案に當つて必要な史料を若干左にあげよう。

(19) 癸巳・停筑紫防人、歸于本郷、差筑紫人令成壹岐・對馬、

(統紀天平九年九月)

(20) 依初還御防人、起筑紫大津、送備前兒嶋、十箇日糧、春稻壹

并伍伯肆拾捌束、

料水手貳人、食稻捌拾束、

(大日本古文書卷二、四六頁、天平十年、筑紫國正税帳。)

(21) 向京防人參般、供給稻壹仟捌伯陸拾柒束、

塩肆斗人別日二勺、宣福陸束陸把、以一束、文六拜。

右、依部領使大宰府少判事從七位下錦部連定麻呂去天

平十年四月十九日、供給如件

中般防人玖伯伍拾參人二日半料類稻玖伯陸拾壹束

食料玖伯伍拾參束人別日四把

塩肆斗柒斗陸合伍勺二勺、宣福捌束

右、依部領使臣六位下上道臣千代去天平十年五月八日

條、供給如件、

後般防人壹伯貳拾肆人二箇日料類稻壹伯束

食料玖拾玖束貳把人別日四把

塩肆斗玖合陸勺二勺、宣福捌把

右、依部領使大宰府少判事從八位下小長谷連常人去天平十年六月十二日、供給如件

(大日本古文書卷二、一三〇頁、天平十年同防國正税帳。)

(22) 舊防人伊豆國貳拾貳人、甲斐國參拾玖人、

相模國貳伯參拾人、安房國參拾參人、

上総國貳伯貳拾參人、下総國貳伯柒拾人、

常陸國貳伯陸拾伍人、合壹仟捌拾貳人、

(大日本古文書卷二、一〇六頁、天平十年駿河國正税帳。)

まず史料(20)によると、勅によつて本郷に歸る防人の筑紫大津より備前兒嶋まで、十日間の食料とし春稻一五四八束と水手二人の料として食稻八〇束が計上されている。こゝに見える勅とは、史料(19)のことであろう。この勅は悉く當時、北九州から畿内にひけて大流行した天然痘のための臨時措置であらう。なお控定ではあらうが、史料(20)により防人往還が海路によつたとわかる。さてその勅の実施は、翌年すなわち、天平十年であつたことと史料(20)(21)より確かめられる。史料(20)について「還御防人」が何人であるのみ、それを計算すると、史料(21)に入る「食料……」人別日四把を適用して、

1人1日4把(8勺)、10日同糧して、1人10日同で、4×10=40(把)と解である。40把=4束、57石15斗4勺=387(石)

三八七人であることになる。

次にこの集団とは恐らく別行動であつたと推定される史料(21)の集団についての記事にはより精しく京に還る防人の様子が表示されている。それによると、「向京防人」の集団は、前・中・後の三般に分れて沿路周防を通過したらしい。この正税帳は、断簡であるので前般の人数が明りかでないが、その人数を計算してみよう。前般には、食料福についでの記事が欠落しているので塩かり人数を算定しよう。そのために日数が不明であるが、(イ)東般の二日半、(ロ)後般の二日の二通りが考えられる。

(イ) 八日半以上

前般 = 4000人 / 八日半であるので、八日半

で、この塩かり人数である。次に 4000人 × 2.5 = 10000人

(ロ) 二日とすれば

八日半と二日の合計の人数を推定する。

4000人 × 2.5 = 10000人

このようにすれば、(イ) 4000人、(ロ) 10000人の二通りが考えられるが、その人数より推定して、(イ) 4000人が正しいであろう。このように前般約 4000人が、大宰府少判事錦部連定麻呂を部領使とし、天平十年四月頃に、又それみづ約一ヶ月づ、の間をおいて中般は、上道臣千代を部領使として四五三人が、後般は大宰史生小長谷連常人を部領使として、一四四人がそれぞれ同防国を東へと通過していつたことが知れる。従つて、この

年表によつて遷郷することになつた防人の数は、史料(21)の参般の計約一八七七人と史料(20)の三八七七人を加えた約二二、〇〇〇人へ約二二、六四四人になるが、前般の 4000人に誤差をみこして約二

三、〇〇〇人としたのであり、恐らくこれくらいが、この頃の防人と

して動員される総数であつたと思われる。

以上史料(21)では、その防人の本郷がどういつ国々であるかは明記されてゐる。すなわち、史料(21)のようにして京に着いた防人は、ここで大宰府官人の手をはなれて史料(17)に規定された諸国遷送の法によつて夫々の国へ歸つていつたらしい。これによると、天平十年に駿河国を通過していつた旧防人の数は、伊豆二二人・甲斐三九人・相模二二〇人・安房三三人・上総二二三人・下総二七〇人・常陸二六五人・計一〇八二人である。

このようにして、駿河国を通過していつた旧防人の集団は月日を欠くが、恐らく先の同防国を通過していつた防人集団と同じものであると思われる。そうすると、史料(21)の集団の総数が約二二、〇〇〇人であつたので、この史料(22)の駿河国を通過した東国防人は、約その半数を占めていたことになる。しかも伊豆・甲斐・相模・安房・上総・下総・常陸は東国の中でも東海道に属する国々であり、万葉集東国防人の例よりすれば、別に東山道に属する信濃・上野・下野・武蔵の国々と、東海道であるのに、こゝには記載されていまい。遠江・駿河が東国防人の中に含まれるので、これ六国の防人があと半分の約一、〇〇〇人を占めていたと推定できるのである。

このように考えると、史料(19)の天平九年に停止された筑紫防人を構成していたのは大部分東国防人であることになる。そうするとそれ以前である天平二年の史料(18)の諸国防人停止は、この東国防人を含む諸国から取られていた防人を停止したのでなく、東国以外の諸国からとられる防人を停止して、専り東

国防人を遣ふこととなつたと解釈できるのである。だが史料(19)の「筑紫防人」は筑紫から徴集された防人のことではなくて、筑紫に配備された防人であることはその史料をみれば明らかである。そう解釈すると、史料(18)の「諸国防人」は、諸国に配備された防人と解せねばならぬ。そう解することは史料(2)の「争連者名防人」により、筑紫以外の辺境に防人が配備されてもいいわけである。だが老嶋・対馬を含めた筑紫以外に防人が置かれた実証がないので、結局「諸国防人」は「諸国に置かれた防人」ではなくて、「諸国より徴集された防人」と解するのが妥当であると思う。

参考文献

- 岸俊男『防人考』(『万葉集大成』十一卷所収)
- 長沼坦『防人考』(『歴史地理』四九の三一六)
- 吉本考次郎『東国の政治的地位と防人』
(『国文学解釈と鑑賞』第二十一卷)
- 岡部精一『防人徴発考』(『史学雑誌』第六卷第十号)

参考文献

- 新訂 国史大系『日本書紀』『続日本紀』『令義解』
増補

- 大日本古文书卷二

二の一四六
二の一三〇
二の一〇三